「李白と謝朓」再考
――「澄江淨如練」句の受容と展開

石　碩

はじめに

「李白と謝朓」は傳統的な研究テーマであり、これまでに様々な研究がなされている。その多くは李白研究の一環として謝朓を取り上げたものであり、李白が謝朓の文學から多大なる影響を受けたことを様々な角度から論證している。[1]

その一方で、謝朓の文學もまた、李白という理解者を得ることによってその評價を確立させる。さらには、李白が指し示す方向に從って謝朓の文學は解釋され、受容されることになる。しかしながら、從來の「李白と謝朓」の關係論は、謝朓詩研究の方法として活用されることはほとんど無かった。謝朓の文學に對する解釋、そして謝朓の詩人像の成立に李白が果たした役割については、これまで十分に檢討されてこなかったのである。

實のところ、李白による謝朓の愛好は、謝朓に對する後人の理解を大きく決定づけることとなる。たとえば、李白が足しげく通い、その地で謝朓に思いを寄せる詩文を多く殘したことで、謝朓は「宣城の詩人」となったのであり、中唐以降、謝朓の文學は宣城時期を中心に理解されるようになる。一方で、「當塗の青山＝謝朓の別業＝李白の墳墓」というよく知られる構圖は、實際には、「李白による謝朓の愛好」が典故として廣まり、擴大解釋される過程で、李白の墳墓（青山）が謝朓に關連づけられた「誤解」である可能性が高い。このことは、筆者のこれまでの研究が明らかにしてきたところである。[2] 謝朓の文學の實像を理解するためには、李白の解釋が果たした役割を愼重に檢討しなければならないだろう。

本稿では、このような視點に立って「李白と謝朓」を再考するべく、謝朓「晩登三山還望京邑」詩の「澄江靜（淨）如練」句を取り上げて論じる。「澄江靜（淨）如練」は、謝朓を代表する名句として人口に膾炙するが、それは決して謝朓一人の力による成果ではなかった。「澄江」句の受容と展開の諸相を明らかにすることにより、新たな角度から李白と謝朓の關係性について考察を試みたい。[3]

一　謝朓「澄江靜如練」句の成立とその特徵

「晩登三山還望京邑」詩（卷三）は、南齊の建武二年（四九五）のころの作であり、謝朓が建康から宣城へ向かう道中、長江沿いにあ

る「三山」から振り返って建康の方角を眺めた際に詠じたものである。[4]従來の武帝派を一掃して帝位についた明帝蕭鸞（四五二―四九八）の命により、謝朓は太守として宣城へ赴任する。都から宣城への道のりは、長江沿いの新林浦・板橋を經由し（謝朓「之宣城郡出新林浦向板橋」詩）、いよいよ建康への出入りの要所であった「三山」にさしかかる。[5]

灞涘望長安　灞の涘より長安を望み
河陽視京縣　河陽より京縣を視る
白日麗飛甍　白日　飛甍を麗らし
參差皆可見　參差として皆　見るべし
餘霞散成綺　餘霞　散じて　綺を成し
澄江靜如練　澄江　靜かなること　練の如し
喧鳥覆春洲　喧鳥　春洲を覆ひ
雜英滿芳甸　雜英　芳甸に滿つ
去矣方滯淫　去かん　方に滯淫せり
懷哉罷歡宴　懷はるる哉　歡宴を罷めん
佳期悵何許　佳期　何許なるかを悵き
淚下如流霰　淚の下ること流霰の如し
有情知望鄉　情有れば鄉を望むを知る
誰能鬢不變　誰か能く　鬢の變ぜざらん

本詩は全十四句からなり、冒頭二句は王粲「七哀詩二首」其一[6]の「南のかた霸陵の岸に登り、首を迴らせて長安を望む（南登霸陵岸、迴首望長安）」、潘岳「河陽縣作二首」其二の「領を引して京室を望む、南路伐柯に在り（引領望京室、南路在伐柯）」を踏まえて、「都城を望む」という主題を提示する。續けて三句目から八句目までは三山からの眺め、夕日に照らされた甍・町竝み、暮れ時の夕燒け雲の名殘り、靜かに横たわる長江の流れ、そして長江の中洲に喧しく囀る鳥と色とりどりの芳しい花々が取り上げられる。さらに九句目から十四句目までは、故鄉（建康）を懷かしみ、心を痛める詩人の姿が描かれる。旅路を急ごう、この地に長く留まりすぎた。宴はかえって望鄉の思いを募らせるだけ。再會の日はいつになるかと思うと、大粒の淚が滴り落ちる。故鄉を想うのも當然のこと、黑髮を白く變えずにおられる者などいるはずもない――「導入（背景の說明）―敍景（暮景）―敍情（望鄉）」という構成は、謝朓の望鄉詩における定型であり、本詩の他にも、異鄉の地で詠まれた「望三湖（荊州）」「落日悵望（宣城）」「冬日晚郡事隙（宣城）」などの作品がこの形を取る。[8]

本詩の五句目・六句目にあたる「餘霞散成綺、澄江靜如練」の一聯は、鄉愁を搔き立てる夕暮れ時の景色として空（雲）と長江（水）を描く。[9]「餘霞（夕燒け雲の名殘り）」「澄江（澄んだ長江の流れ）」はいずれも謝朓による造語であり、「散ず」と「靜かに」は夕燒け雲と長江の狀態（動と靜）が對比されている。さらに「綺（文樣が織り込まれた絹織物）を成す」「練（白い無地の絹織物）の如し」は、比喩對象の素材・色彩の特徵を利用して、兩者の違いを際立たせている。[10]

ところでこの「餘霞」「澄江」の一聯は、整然とした對偶表現によって暮れ時の瞬間的な美しさを描いているが、同時に、特定の景觀に根差さない、極めて一般化された表現であることに氣づく。おおよそ黃昏時の長江沿岸であれば何處からでも目にすることのできる、典型的な江南の暮景がそこにはあり、「三山」に固有の景色が描かれているわけではない。さらに言えば、「澄江」句は、長江の動きのない狀態（靜）を述べる表現であるがゆえに、單獨では夕暮れという時間帶さえも示すことはできない。要するに、「澄江」句は「餘霞」句と對

を成すことで、はじめて黄昏時の長江の景觀を形作るのであり、さらに「餘霞」「澄江」の一聯は、「晩登三山還望京邑」詩の中に配置されることで、はじめて鄕愁を喚起する光景となり得るのである。

このような謝朓詩の敍景の特徴は、同じく「三山」を詠じた他の詩人の作品と比較することで、さらに浮き彫りとなる。例えば謝靈運の「遊嶺門山」詩[11]では、永嘉郡の嶺門山を形容する際に、以下のように「三山」を取り上げている。

千圻邈不同　千圻（せんき）邈（貌）同じからず
萬嶺狀皆異　萬嶺　狀（かたち）皆　異なれり
威摧三山峭　威摧（いさい）として三山より峭（けは）しく
瀙汨兩江駛　瀙汨（しっいつ）として兩江より駛（はや）し（以下省略）

千もの崖は各々違う姿をしており、萬もの嶺はそれぞれ形狀が異なる。その高峻な樣は三山よりも險しく、流れの音は兩江よりも速い――「三山」と對をなす「兩江」がどこを指すかに關しては諸說あるが、長江が建康の手前で二筋に分かれて都城の内外に流れ入る樣、もしくは長江が中洲によって二分された樣子を表すと思われる。いずれにせよ、固有の名詞を取り上げてその特徴を描寫することで、建康周邊の地形と景觀が具體的に示されており、一句ごとに特定の景色が浮かび上がる。また次に掲げる鮑照の「還都至三山望石頭城」詩[12]は、謝朓詩同樣、「三山」から都の方角（石頭城）を眺めて詠じた作品である。

兩江皎平迴　兩江　皎として平らかに迴（はる）かに
三山鬱駢羅　三山　鬱として駢（なら）び羅（つら）なる
南帆望越嶠　南帆　越嶠を望み
北榜指齊河　北榜　齊河を指す（以下省略）

二筋の大河は白くどこまでも平ら、三山は木々が生い茂って竝び連なる。南に向く帆は越の鋭く高い山を望み、北方に引く櫂は齊の大河を指し示す――謝朓詩が建康から離れる道中の作であるのに對し、鮑照詩は都へ歸還する際の作品であるが、景觀はほぼ一致する。ところが、鮑照詩の場合には、長江と三山の景觀、そして南北に廣がる（であろう）景色を事細かに記述しており、謝靈運詩同樣、「三山」という特定の地形と景觀に密着した描寫であることが分かる。謝朓の詩が、敍景描寫の中から一切の個別性を排除し、一般化された表現を用いているのとは極めて對照的であろう[13]。

一般化された表現は、「場所（または時間）を特定する情報」を敢えて排除することにより、對象（夕燒け雲と長江）の形容を際立たせる。謝朓の場合、「遊東田」詩（卷三）の「魚戲れて新荷動き、鳥散じて餘花落つ（魚戲新荷動、鳥散餘花落）」、「之宣城郡出新林浦向板橋」詩（卷三）の「天際に歸舟を識り、雲中に江樹を辨（みわけ）り（天際識歸舟、雲中辨江樹）」などの詩句は、いずれも整然とした對偶表現によって、詩人の眼前に廣がる景色を忠實に記してはいるが、その部分のみを抜き出すと、詠まれた場所や背景は完全に消失してしまう。このように個別性を削ぎ落として精緻に構成された詩句は、前後の文脈に依據する形で、詩人の情感が投影されることになる。「晩登三山還望京邑」詩の場合、すべての敍景描寫は「鄕愁」という主題に收斂される。それは同時に、謝朓詩の風景描寫が、單獨では具體性が希薄で、主題に合わせて印象を變化させる表現であったことをも意味している。このことがまさに、後の李白によって、謝朓の「澄江」句が吸收され、變貌を遂げてゆく一因となる。

二　李白詩における「澄江淨如練」とその特徴

李白「金陵城西樓月下吟」詩（巻七）は天寶八載（七四九）ころの作とされ[14]、六朝の古都であった金陵の地で詠まれた。

金陵夜寂涼風發　　金陵　夜　寂として涼風發（おこ）り
獨上高樓望吳越　　獨り高樓に上りて吳越を望む
白雲映水搖空城　　白雲　水に映じて空城を搖（ゆす）り
白露垂珠滴秋月　　白露　珠を垂れて秋月に滴る
月下沉吟久不歸　　月下に沉吟して久しく歸らず
古來相接眼中稀　　古來　相接（あひ）ぐもの眼中に稀なり
解道澄江淨如練　　道（い）ひ解（え）たり　澄江　淨きこと練の如しと
令人長憶謝玄暉　　人をして長く謝玄暉を憶はしむ

金陵の夜はしずかに更けて涼しい風が吹きわたり、ひとり高樓に登って吳越のかなたを眺めやる。白雲は長江の水に映って人けのない城壁の影とともに搖れ、白露は眞珠のように結んで秋の月光を映して滴る。月下で低く詩を吟じ、しばらく歸らずその場に留まる。古來より相繼ぐべき詩人は眼中にほとんどいない。それにしても「澄江　淨きこと練の如し」とはよくぞ言ったものよ、この詩句こそ、私に、かの謝玄暉を憶わせてやまないのだ――。

本詩は、月夜に高樓に登り、古人（謝朓）を思慕追憶するという主題をとる。先行研究の多くは、本詩を「秋登宣城謝朓北樓」詩（巻二十一）の「誰か念はん　北樓の上、風に臨みて謝公を懷はんとは（誰念北樓上、臨風懷謝公）」などの表現と竝べて、李白による謝朓の愛好を裏付ける作品として解釋してきた[15]。その一方で、謝朓の「澄江」句の引用という點に着眼すると、實は李白詩において、「澄江」句の印象が謝朓の原句から大きく外れていることに氣づくこととなる。

相違の一つは、本來「落日望鄕」の主題に沿って夕暮れ時の光景を描寫した「澄江」の句が、李白の詩では一轉して「月夜に謝朓を憶う」という主題を引き立てる夜景の詩句として、しかも一句單獨で取り上げられたことである。先述のとおり、そもそも「澄江」の句は「餘霞」の句と一聯を作ることではじめて暮景の意味合いを持つ。しかし、李白詩において「餘霞」句と引き離されたことにより、「澄江」句は薄暮の景としての一義性を完全に失い、むしろ李白詩が詠じられた背景――夜の、月下の光景の中に取り込まれてしまう。

第二の相違は、謝朓「澄江靜如練」句の「靜」の字が、李白詩では「澄江淨如練」の形で取り上げられており、それに伴って、詩句が描き出す情景にも大きな變化が生じたことである

そもそも今日見ることのできる謝朓詩の選集・別集は、『文選』をはじめとするすべてが「靜」の字に作っており、また謝朓詩の對句表現から見ても、「靜」の字が本來の形であったことは想像に難くない。しかし、唐宋期においては、「靜」字を「淨」字に作る謝朓詩のテキストも存在していた可能性を否定できない。たとえば『文鏡祕府論』地卷「十四例」其十一[16]は謝朓「晚登三山還望京邑」詩の當該句を引いており、ここでは「靜」を「淨」に作っている。また『舊唐書』卷一六六・列傳一一六「白居易[17]」でも謝朓詩を一部引用して「澄江淨如練」と記している。

字音の近似という觀點から檢討すると、「靜」と「淨」はどちらも從母・淸韻に屬し、上聲（靜）と去聲（淨）の區別しかない。さらに盛唐以降、全濁上聲は去聲となるため、二字の發音は完全に一致していたものと思われる。このことが、「靜」を「淨」に作る文獻を生み

出した直接的な原因であった可能性は高い。ただし、「靜」と「淨」の通假が認められる用例は見當たらず、また字義も異なるため、謝朓の部分的な詩句を引用する文獻に二字の混用が散見するのみで、「晩登三山還望京邑」詩本來の用字が疑われることはほとんどなかったと思われる。その證據に、後世、この謝朓詩の一篇全體を收錄する諸テキストがいずれも「靜」字に作るのに對し、「澄江」句を單獨で引く文獻では、明清期に至ってなお、「靜」「淨」の異同が考慮されずに混在することが、本論後述の複數の用例によって確認される。

一方、李白詩の「解道澄江淨如練」句は、李白詩の選集・別集ではすべて「淨」字に作っており、また李白詩の用法から見ても、「淨」字の方がその世界觀を良く表している。「靜」字を用いた場合、「澄江」句は水面の靜止的な狀態（波がなく靜か）を述べることとなり、謝朓詩で共に一聯を作る「餘霞散成綺」の句が示す動的な變化の相と明確な對偶表現をなす。その一方で、李白詩のように「淨」字を用いた場合、「澄江」句は水面の性質（澄んで明るい）を表すこととなり、むしろ月下の光景、より具體的に言えば、月の光が澄んだ長江の水面に降り瀉ぐ樣子が表現されることになる。李白詩は、「靜」と同じ字音を持つ「淨」の字を意圖的に用いることで、謝朓詩元來の響きを保持して續く「令人長憶謝玄暉」句の情感を强め、それでいながら原詩とはまったく異なる、月夜の情景を描き出すことに成功したと言ってよい。[18]

こうして、謝朓の「澄江靜如練」句は、李白詩の主題に導かれて、夜の景色という印象を獲得し、さらには「淨」字の持つイメージから、月光との一體性を高めてゆくこととなる。

李白が好んで「澄江」句の持つ印象を暮景から夜景、とりわけ月下の光景へと轉換させたことは、前揭の「金陵城西樓月下吟」詩一首のみならず、謝朓のこの句を踏まえた他の作品からも同樣に見て取れる。たとえば、「秋夜板橋浦汎月獨酌懷謝朓」詩（卷二十二）に次のようにいう。

天上何所有　天上　何か有る所ぞ
迢迢白玉繩　迢迢たり　白玉の繩
斜低建章闕　斜めに低る　建章の闕
耿耿對金陵　耿耿として金陵に對す
漢水舊如練　漢水　舊に練の如く
霜江夜清澄　霜江　夜　清澄なり
長川瀉落月　長川　落月に瀉ぎ
洲渚曉寒凝　洲渚　曉寒凝る
獨酌板橋浦　獨酌す　板橋の浦
古人誰可徵　古人　誰か徵すべき
玄暉難再得　玄暉　再び得難く
灑酒氣塡膺　酒を灑ぎて　氣　膺を塡む

本詩は、謝朓が宣城へ赴く道中に鄉愁を綴った「之宣城郡出新林浦向板橋」詩を踏まえ、同じ地點にたって古人（謝朓）を偲ぶ。五句目から八句目、漢水は今も昔も白い練絹のようであり、寒々とした長江は夜になると淸らかに澄み切る。長い川は西に落ちる月とともに流れ、中洲や水際のあたりでははやくも寒氣が凝り固まる――詩中の「漢水舊如練、霜江夜淸澄」の表現は、明らかに謝朓の「澄江靜如練」句を踏まえたものであるが、ここで表現されているのは、冷え込む夜に、月の光が皎皎と照らす長江の流れである。

また、「三山望金陵寄殷淑」詩（卷十四）には次のような表現が見え

ている。

三山懷謝朓　　三山　謝朓を懷ひ
水澹望長安　　水　澹にして長安を望む
蕪沒河陽縣　　蕪沒す　河陽の縣
秋江正北看　　秋江　正に北に看る
盧龍霜氣冷　　盧龍　霜氣冷やかに
鵁鶄月光寒　　鵁鶄（しじゃく）　月光寒し
耿耿憶瓊樹　　耿耿として瓊樹（けいじゅ）を憶ひ
天涯寄一歡　　天涯　一歡を寄す

本詩は言うまでもなく謝朓「晩登三山還望京邑」詩を意識して詠じられた作品であり、冒頭二句にもその旨を明記している。五句目・六句目、盧龍山のあたりには霜降るような寒氣が滿ち、鵁鶄樓には月の光が寒々しく輝く――謝朓詩と同じく「三山望都城（金陵）」を主題としながら、李白が意圖的に謝朓詩の薄暮の時間を逸脱して、月の光が瀉ぐ夜の景色として詩句を再構成していることが見て取れよう。

李白が意識的に「澄江」句を月下の光景に吸收しようとした、その一つの傍證となり得る作品として、次の「落日憶山中」詩（卷二十三）がある。

雨後烟景綠　　雨後　烟景綠に
晴天散餘霞　　晴天　餘霞を散ず
東風隨春歸　　東風　春に隨ひて歸り
發我枝上花　　我が枝上の花を發かしむ（以下省略）

「澄江靜（淨）如練」句は李白をはじめ多くの唐詩人によって繼承されることになるが、一方の「餘霞散成綺」句はどうであったか。謝朓の造語であった「餘霞」はその後、詩語となって頻繁に用いられるようになるものの、「餘霞散ず」というまとまった形で繼承された用例は、唐詩では大變少ない[19]。その中の例外となるのが、李白のこの詩であり、謝朓の「餘霞」句を想起させる形で「餘霞を散ず」の表現を用いて、雨の後の夕暮れ時を描寫している。先の「金陵城西樓月下吟」詩と比較すると、その時間的背景の相違はいっそう明白となり、李白が極めて意識的に、謝朓詩の「餘霞」句を暮景、「澄江」句を夜景（月夜）として、區別して解釋していたことが見て取れるだろう。

中國の古典詩歌は、前人の語彙・表現を繼承、發展させることによって、新たな文學作品を生み出し續けてきた。六朝期に誕生した詩語が、時代の變遷に從って意味合いを變化させることは決して珍しいことではなく、たいていの場合には、語彙が定着するにつれて、そもそも誰の造語であったのかは意識されなくなるものである。しかしながら「澄江」句の場合、謝朓を思い起こす場面で、特定の一句がほぼ原形のままで引用されたがゆえに、謝朓の作品であることは明確に意識され續けることとなる。それでいながら、夕暮れ時の長江から月の光瀉ぐ長江へと、詩の背景に流れる時間は轉換を遂げたのである。

極度に一般化された表現である謝朓の「澄江靜如練」句は、區々たる個別性を持たないが故に、李白の文學に容易に吸收され、李白の主題に合致する方向で再構成されることになる。そうして「澄江」句は、謝朓詩の表現と李白詩の世界觀が融合された形で、以降、新たな文學的意味を帶びてゆくこととなる。

三　「李白と謝朓」――「澄江淨如練」句の受容と展開

謝朓「晩登三山還望京邑」詩は『文選』卷二十七に收錄され、廣く

唐以降の詩人の目に觸れることとなる。それにともない、敍景描寫として用いられた「餘霞」「成綺」「喧鳥」「春洲」「雜英」「芳甸」などの語彙は、唐代の詩において、それぞれが獨立した詩語として定着し、必ずしも原作者である謝朓の存在は意識されなくなる。[20] ところが「澄江靜（淨）如練」句に限っては、一般的な詩語としての「澄江」「如練」の用例がある一方で、他の詩句の受容の情況とは明確に異なるいくつかの傾向が現れている。

一つ目は、「澄江」句全體を意識して作りだされた表現が多く出現したことである。たとえば、晩唐の羅隱「秋日富春江行」詩（卷六五九）に、

遠岸平如翦　遠岸 平らかなること翦るが如し
澄江靜似鋪　澄江 靜かなること鋪くに似たり

同じく晩唐の唐彥謙「漢代」詩（卷六七二）に、

水淨疑澄練　水 淨きこと 澄練なるかと疑ひ
霞孤慾建標　霞 孤なること 標を建てんと慾す

南唐の李中「和潯陽宰感舊絶句五首」其二（卷七五〇）に、

潯駭物景眞難及　潯 物景に駭き 眞に及ぶこと難し
練瀉澄江最好看　練 澄江に瀉ぎて 最も看るに好し

五代の譚用之「江館秋夕」詩（卷七六四）に、

耿耿銀河雁半橫　耿耿たる銀河 雁 半ば橫ふ
夢敲金碧轆轤輕　夢 金碧を敲て 轆轤輕し
滿窗謝練江風白　滿窗の謝練 江風白し
一枕齊紈海月明　一枕の齊紈 海月明らかなり

とあるのがその例である。右にあげた「澄江靜似鋪」「水淨疑澄練」「練瀉澄江」「謝練」などの表現は、いずれも「澄江」句の語彙や印象を巧妙に組み替えて新たに作りだされた表現であり、謝朓の「澄江靜（淨）如練」句を直接的に踏まえていることは疑いない。同趣の詩句が多様化することは、詩的表現としての成熟を意味するが、謝朓詩の場合、個別の詩語ではなく、特定の一句全體が注目を浴び、表現として成熟していったことがうかがえる。

二つ目の特徴は、謝朓の句とともに、李白「金陵城西樓月下吟」詩の詩的世界を踏まえる作品が多く見られることである。たとえば、中唐の張正一「和武相公中秋錦樓玩月得蒼字」詩（卷三一八）に、

高秋今夜月　高秋 今夜の月
皓色正蒼蒼　皓色 正に蒼蒼たり
遠水澄如練　遠水 澄むこと練の如し
孤鴻迴帶霜　孤鴻 迴か霜を帶ぶ

同じく中唐の盧仝「送尉遲羽之歸宣州」詩（卷三八七）に、

君歸呼　君 歸るや
君歸興不孤　君 歸るも 興 孤ならず
謝朓澄江今夜月　謝朓の澄江 今夜の月
也應憶著此山夫　也た應に此の山夫を憶著すべし

とあり、「高秋今夜月」「謝朓澄江今夜月」の表現から、李白が月下で謝朓の詩句を詠じた光景を再現していることが讀みとれる。下って晩唐の李商隱「和韋潘前輩七月十二日夜泊池州城下先寄上李使君」詩（卷五四〇）には、

正是澄江如練處　正に是れ 澄江 練の如き處
玄暉應喜見詩人　玄暉 應に詩人に見ゆるに喜ぶべし

とあり、同詩人の「江上憶嚴五廣休」詩（卷五四一）には、

逢著澄江不敢詠　澄江に逢著して敢へて詠まず

鎮西留與謝功曹　鎮西 留めて 謝功曹に與ふ

という句が見えている。典故を多用することで知られる李商隱の作品であるが、やはりそこに李白の存在は明らかで、前者では、「これこそまさに、かの『澄江』の句に詠まれた光景だ、謝玄暉も詩人に會うことができてさぞや喜んでいることだろう」といい、後者では、「澄んだ長江を目にしても敢えて（李白のように）詠じることはしない、鎮西將軍の稱號はかの謝朓に與えることとしよう」という。

そして三つ目に注目されるのは、右にあげたような作品が、主に中唐後期から晩唐にかけて集中していることである。晩唐において、「李白による謝朓の愛好」は、それ自體が一つの典故として見なされるようになり、時には實際を越えた兩者の結びつきが詩中で描かれるようになる。許棠「宿青山館」詩（卷六〇三）の「雲は李白の墓を藏し、苔は謝公の詩を暗む（雲藏李白墓、苔暗謝公詩）」、韋莊「過當塗縣」詩（卷六九七）の「謝公 山に墅有り、李白 酒に樓無し（謝公山有墅、李白酒無樓）」などの作品はその代表的な例である。「澄江」句はこのような背景の中で、「李白と謝朓」の結びつきの強さを證明する佳話として、謝朓詩そのものに對する注目をはるかに上回る形で受け入れられるようになったと考えられる。

晩唐當時の「澄江」句に對する注目とその流行を裏付けるものとして、韋莊『又玄集』序文の冒頭に、「謝玄暉は文集に編 盈てるも、止だ『澄江』の句を誦するのみ（謝玄暉文集盈編、止誦「澄江」之句）」という一文が確認できる。[21]「餘霞」「澄江」が一聯として注目されるならばともかく、韋莊ら晩唐の詩人がかくも「澄江」の一句のみに執着するのは、やはり李白の存在に大きな原因があると考えざるを得ないだろう。[22]

このように、李白「金陵城西樓月下吟」詩における引用を直接的な契機として、そして晩唐以降の、「李白による謝朓の愛好」の典故化の中で、「澄江」句は、必ずしも謝朓ひとりの詩句とは認識されなくなる。これ以降、李白と謝朓による「合作」としての「澄江」の句が展開されてゆくこととなる。たとえば、北宋の梅堯臣「張淳叟獻詩永叔同永叔和之」詩[23]に、

夜吟謝朓澄江練　夜は吟ず 謝朓 澄江の練
露濕陶潛漉酒巾　露は濕す 陶潛 漉酒の巾

同じく北宋の陳淵「舟中誦子靜江上之作爲和二絶」其一[24]に、

月下長吟露濕衣　月下 長く吟じて 露 衣を濕す
謫仙嘗憶謝元暉　謫仙 嘗て憶ふ 謝元暉を
澄江一句無今古　澄江の一句 今古無し
何似晴空獨鳥飛　何ぞ晴空の獨鳥の飛ぶに似たるか

と詠じられているが、いずれにおいても「夜（月）」「李白」「謝朓」「澄江」が一體の典故として鍛え上げられ、不可分のものとなっていることが見て取れる。さらには、「澄江」の句に取材した景勝地も新たに造られたものと見え、たとえば『輿地紀勝』卷九[25]は、次のように「澄江亭」「澄江門」と題する北宋の楊蟠の詩を引いている。その「澄江亭」詩では、

月靜秋紋收白穀　月 靜かにして 秋紋 白穀を收め
天橫暮色變黃銀　天 橫たはりて 暮色 黃銀に變ず
風流小謝千年外　風流なる小謝 千年の外
解詠消愁更有人　詠み解たり 愁ひを消すに更に人有りと

と詠じられ、「澄江門」詩では、

浦外落霞爭捲燒　浦外の落霞 爭ひて燒を捲く

池中流水自鳴絃　池中の流水 自ら絃を鳴らす
扶欄下見蓬萊影　欄に扶れば下に見ゆ 蓬萊の影
一半仙魂在月邊　一半の仙魂 月邊に在り

と詠じられており、謝朓詩・李白詩の雙方に基づく江南の佳景が形作られている。

また、宋代における詩話・詩論の増加により、「澄江」句に對する具體的な評價も散見するようになる。次に擧げる北宋の黄轍『碧溪詩話』巻五[26]の論評はその一例であり、佳句の得難さを述べる際に、「餘霞」の句は「澄江」の句に及ばないと例示する。

然るに昔人の「園柳 鳴禽を變ず」は、竟に「池塘 春草を生ず」に及ばず、「餘霞 散じて綺を成す」は、「澄江 靜かなること練の如し」に及ばず…其の實を全うする者、未だ多くは得 易からざるを知る。（然昔人「園柳變鳴禽」、竟不及「池塘生春草」、「餘霞散成綺」、不及「澄江靜如練」…知全其實者、未易多得）

無論、詩句自體の優劣は様々な角度から論評されるべきであろうが、同文で引かれている謝靈運の「池塘生春草」句が、謝惠連との兄弟愛を示す逸話によって名句としての地位を築いたことを勘案すれば、[27]「澄江」句の場合もまた、李白による引用が、その高い評價の背景にあると推定してよいだろう。

南宋の紹興二十七年（一一五七）、宣州の長官を務めた樓炤（政和間進士）によって、その後の各種『謝朓集』の祖本となる『謝宣城詩集』五巻が編纂される。[28]その序文[29]にも、次に示すとおり、李白が謝朓の「澄江」の句を詠じたという逸話が記されており、謝朓の詩を取り上げる際に、李白による引用がある種の權威づけと見なされていたことが分かる。

南齊吏部郎謝朓、五言詩に長じ、其の宣城に在りて賦する所、藻繢尤も精なり、故に李太白は「澄江」の句を詠じて其の人を思ひ、杜少陵もまた曰く「詩は謝宣城に接ぐ」と。（南齊吏部郎謝朓、長五言詩、其在宣城所賦、藻繢尤精、故李太白詠「澄江」之句而思其人、杜少陵亦曰「詩接謝宣城」也）

こうして、「澄江」の句は、李白詩の影響力の大きさに牽引される形で、表現として豊かに廣がり、また「謝朓を代表する名句」として、文學的にも高く評價されるようになる。やがて、「澄江」句の受容と展開は、「晚登三山還望京邑」詩一首のみならず、謝朓詩全體に對する後人の評價にも影響を及ぼすこととなる。

四　秀句の詩人、謝朓

謝朓の「澄江」の句が後世の詩人の注目するところとなった背景には、もう一つ、大きな要因が存在する。それは、李白詩の「解道澄江淨如練」句が「襲全句（前人の詩賦の名句をそのまま引用する）」という「手法」となって定着し、後人に遊戯的に利用されたことである。[30]「二字＋五言」という特徴的な形式、そして前人の詩句を引用して古人を贊美・論評するという手法は、時代を越えて廣く親しまれることとなる。同時に、「襲全句」の鼻祖たる李白の詩に引用された謝朓の「澄江」句もまた、いわば「傳統的な素材」として、李白詩の形式を踏襲する多くの詩歌に登場することとなる。たとえば、先にも示した晚唐の李商隱「和韋潘前輩七月十二日夜泊池州城下先寄上李使君」詩に、

正是澄江如練處　正に是れ 澄江 練の如き處
玄暉應喜見詩人　玄暉 應に詩人に見ゆるに喜ぶべし

北宋の黄庭堅「題晁以道雪雁圖」詩[31]に、

憑誰說與謝玄暉　誰に憑りてか謝玄暉に說かん
莫道澄江靜如練　道ふ莫れ 澄江 靜かなること練の如しと

南宋の楊萬里「夜宿東渚放歌三首」其三[32]に、

暮鴉翠紗忽不見　暮鴉 翠紗 忽ち見えず
只見澄江淨如練　只だ見る 澄江 淨きこと練の如きを

元の楊維楨「題錢選畫長江萬里圖」詩[33]に、

解道澄江靚如練　道ひ解たり 澄江 靚かなること練の如しと
醉呼小謝開青眸　醉ひて小謝を呼びて青眸を開かん

明の謝肇淛「題檇李烟雨樓」詩[34]に、

一片澄江淨如練　一片の澄江 淨きこと練の如し
令人對此思孤騫　人をして此に對して孤騫を思はしむ

と見えるのが、その代表的な例である。

「襲全句」という手法は、もとの作品から特定の表現のみを抜き出すため、否應なく、引用された一句の獨立性が強調されることになる。李白詩がそうであったように、李白詩の形式に倣う右のような作品羣もまた、謝朓の「澄江」句を、本來の「晚登三山還望京邑」詩の文脈から切り離された獨立の表現として突出させてしまう。

こうして謝朓の「澄江」の一句のみが繼續的に復唱され、繰り返し注目を浴びることで、後人の謝朓に対する印象もまた、「澄江」の一句を中心に展開されるようになる。たとえば、明の姚孫業「連夕看月同四兄用澄字」其三[35]にいう、

好借玄暉句　好みて玄暉の句を借る
如江一練澄　江の一練 澄むが如し
頻宵能有此　宵に頻るに 能く此れ有り
允矣月之恆　允なるかな 月の恆なること

また、同じく明の徐煒「六月六日集鼇峰玉眞院限韻[36]」に見える、

郭外澄江淸似練　郭外の澄江 淸きこと練に似たり
幾人詩句比玄暉　幾人の詩句 玄暉に比せんや

といった詩句からは、謝朓詩に對する稱贊が、「澄江」の句を中心に爲されていたことが見て取れる。

特定の詩句（「澄江」句）に對する見方が、詩人の評價に直接的に結び付くことにより、人々の間には「謝朓＝澄江句＝秀句」という圖式化された觀念が浸透する。このような見方は、結局のところ、「謝朓＝秀句を殘した詩人」という認識を强めてしまうこととなる。たとえば、南宋の趙師秀「葉侍郎送紅芍藥」詩[37]に、

舊遊尙憶揚州夢　舊遊 尙ほ憶ふ 揚州の夢を
麗句難同謝朓誇　麗句 謝朓の誇りと同じくすること難し

明の程敏政「題歸隱卷」詩[38]に、

老向太平吾與子　太平に老いたり 吾と子と
卻因佳句憶玄暉　卻て佳句に因りて玄暉を憶ふ

明の林誌「送江贊府之官太平」詩[39]に、

卻憶玄暉多藻句　卻て玄暉の藻句の多きを憶ふ
令人送別有餘情　人をして送別に餘情有らしむ

明の陳子龍「寄宣城令余賡之」其二[40]に、

更得錦箋多麗句　更に錦箋の麗句の多きを得
青山還屬謝玄暉　青山 還た謝玄暉に屬す

と見えるが、これらの作品では、謝朓の詩句は「麗句」「佳句」「藻句」と形容され、いずれも高く評價すべきものとして取り上げられている。ここで注目すべきは、先の姚孫業詩（「好借玄暉句」）と徐煒詩（「幾人詩句比玄暉」）が、「澄江」の一句に對してなされた評價であ

るのに對し、右の作品羣はいずれも謝朓の詩一般について述べている點である。これは、「澄江」という優れた句の存在が、結果的に、謝朓の詩を突出した「秀句」において評價する風潮を生み出したことを意味している。[41] そして、謝朓詩に對するこのような理解を育んだのは、「金陵城西樓月下吟」詩に謝朓の句を引用し、「澄江」句流行の直接的な原因となった李白その人に他ならない。

明の鍾惺は、その『古詩歸』卷十三・謝朓「冬緒羈懷示蕭諮議虞田曹劉江二常侍」詩注[42]において、謝朓詩から十八もの詩句を取り上げて、「澄江」句が李白の引用によって過剰に流行してしまったことを、次のように痛烈に批判している。

謝詩の人を驚かす處は當に「風草 霜を留めず」の此等（これら）の句に之を求むべく、二句[43]もまた謝詩の評と作すべし。其の他の「日出でて 衆鳥散じ」…「珥（みみだま）を墮して琴心に答ふ」の如きは、皆 遠（はるか）に「澄江 靜かなること練の如し」等の句に勝るも、太白の偶然拈出するに因りて、千古の耳食 同聲なるのみ。（謝詩驚人處當于「風草不留霜」此等句求之、二句亦可作謝詩評。其他如「日出衆鳥散」…「墮珥答琴心」、皆遠勝「澄江靜如練」等句、因太白偶然拈出、千古耳食同聲耳）

ここに示された鍾惺の見解は、謝朓の文學が李白の影響下で、恣意的かつ選擇的に後人の評價を獲得してきたことを示唆している。同樣の指摘として、清の姚瑩の「論詩絶句六十首」其十[44]に「大江 日夜客心悲しむ、語を發するも蒼茫たり 逸思飛ぶ。千載 紛紛として佳句を摘む、還た應に太白の元暉を誤るべし（大江日夜客心悲、發語蒼茫逸思飛。千載紛紛摘佳句、還應太白誤元暉）」とあり、「佳句を摘む――特定の句だけを評價する」という行爲によって、李白は謝朓が誤解される契機を作ってしまったのではないか、という問題を提起している。姚瑩の指摘が妥當かどうかはともかくとして、李白による引用が、謝朓詩の受容と展開に大きな影響を及ぼし、その評價の根幹を形作ったことは明らかであろう。

むすび

本稿では、謝朓詩を中核に据え、その受容・展開史研究の立場に立脚して「李白と謝朓」の關係を再考した。その考察のための素材として、謝朓「晩登三山還望京邑」詩の「澄江靜（淨）如練」句を取り上げ、この句がどのように成立し、受容・展開を遂げたのか、そしてそのことが後人の謝朓詩理解にどのような影響を與えたのかを明らかにしてきた。

そもそも謝朓の「晩登三山還望京邑」詩は、建康を離れて宣城へ赴任する詩人の、「落日望鄉」の思いを詠じた作品であり、「餘霞」「澄江」は暮景の美しさを形容した對偶表現であった。謝朓の文學としての「澄江」句を解釋するならば、それは「餘霞」句との一聯の中で、更には「晩登三山還望京邑」詩の一篇の中に置かれてこそ最大限の效果を發揮する描寫であり、鄉愁に打ちひしがれる詩人が目にした、黄昏時のうつろいやすい長江の姿そのものだったのである。

しかし、「澄江」句は作詩の特定の時と場の情況に制約されない、極度に一般化された表現であったがために、李白「金陵城西樓月下吟」詩に單獨で引用されて以後、李白の詩的世界に呑み込まれ、むしろ月下の光景としてその印象を上書きされてしまう。同時に、李白詩の影響力によって、「澄江」句は謝朓を代表する名句として認識されるようになり、やがて「秀句」によって謝朓詩を理解する風潮が高まることとなる。「澄江」句の受容と展開は、謝朓詩の解釋・評價の歴

史において、李白の見方が如何に支配的であったのかを如實に示すものとなった。

謝朓の文學は、他ならぬ李白との緊密な關わり合いの中で熟成され、時に變貌を遂げながら、中國文學史に名を刻むことになる。謝朓の評價史を研究する上で、「李白に愛された謝朓」という視點は、引き續き重要な問題提起となるだろう。そして、謝朓の文學の本質を考えるためにも、謝朓詩解釋の方向を決定づけた李白の存在に、今一度、自覺的になる必要がある。

注

（1）「李白と謝朓」をテーマとする代表的な研究に、松浦友久「李白における謝朓の像――白露垂珠滴秋月」（早稲田大學中國古典研究會『中國古典研究』十三號、一九六五年）、茆家培・李子龍主編『謝朓與李白研究』（人民文學出版社、一九九五年）などがある。

（2）拙稿「李白『志在青山』考――謝朓別業の存在をめぐって」（早稲田大學中國文學會『中國文學研究』第三十九期、二〇一三年）を參照。

（3）本文で引用する謝朓詩は曹融南『謝宣城集校注』（上海古籍出版社、一九九一年）、李白詩は『李太白全集』（中華書局、一九七七年）を底本とする。また本文で取り上げる唐代の詩は、一部を除いて『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）に據る。いずれも詩題の後ろに卷數を記す。

（4）劉躍進『六朝作家年譜』（黑龍江教育出版社、一九九九年）に據る。

（5）『文選』卷二十七李善注引『丹陽記』に「江寧縣北十二里、濱江有三山相接、卽名爲三山」とある（上海古籍出版社、一九八六年）。

（6）前掲『文選』卷二十三。

（7）前掲『文選』卷二十六。

（8）落日望鄉は謝朓詩における重要なテーマの一つであり、興膳宏「謝朓詩の抒情」は「…薄暮の時間およびその景觀に對して、謝朓が強い愛好を示したことが知られる。…晩景はいわば條件反射的な必然性によって、望鄉あるいは歸田の志を呼び起こしている」と指摘する（『東方學』第三十九輯、一九七〇年）。

（9）「餘霞」「澄江」聯の敍景描寫に關して、魏耕原『謝朓詩論』第六章「謝朓詩山水景物描寫的律化結構」は「『餘霞散成綺、澄江靜如練』…這兩句寫黃昏景觀、晩霞多彩鮮麗、遠水無波而明亮反光、不僅如錦緞如白綢、而且借用綢緞的柔軟光滑的質感、更能表達出日暮黃昏柔和瀟散的適意。…确實捕捉了轉瞬卽逝處于變化中景物的光度和質感、因爲暮色很快會淹沒一切」と說明する（中國社會科學出版社、二〇〇四年）。

（10）逯欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局、一九八三年）に據って調査したところ、六朝期における「成綺」の用例は「日照爛成綺、風來聚疑雪。試采一枝歸、願持因遠別」（梁・劉綺「折花聯句」）、「…乃有綺雲之館、頳霞之臺」（梁・江淹「學梁王兎園賦幷序」）の二例のみであり、「如練」の用例は「花樹雜爲錦、月池皎如練」（南齊・謝朓（一作王融）「別王僧孺」）、「秋月光如練、照曜三爵臺」（梁・沈約「登臺望秋月」）、「練練波中月、亭亭雲上枝」（梁・吳均「遙贈周承」）、「昆明夜月光如練、上林朝花色如霞」（梁・蕭繹「春別應令詩四首」其一）の四例のみである。謝朓の用例は極めて早い段階のものであり、「餘霞」「澄江」同樣、造語として意識的に詩中に取り入れた可能性が高い。

（11）顧紹柏『謝靈運集校注』（中州古籍出版社、一九八七年）。詩中の「邈」字について、顧注は「邈、似應作『貌』。『貌』與下句『狀』構成一對近義詞」と指摘しており、本論は顧說に從って解釋を行った。

（12）丁福林・叢玲玲『鮑照集校注』卷五（中華書局、二〇一二年）。

（13）鮑照詩と謝朓詩の敍景描寫を比較すると、「川末澄遠波」（鮑）と「澄

江靜如練」（謝）、「攢樓貫白日」（鮑）と「白日麗飛甍」（謝）、「摛堞隱丹霞」（鮑）と「餘霞散成綺」（謝）など、取り上げる題材が酷似していることが分かる。このことからも、謝朓が意識的に鮑照詩を下敷きとしながら、具體性を捨象した敍景描寫を試みた可能性が高いと考えられよう。

(14) 安旗・薛天緯他『李白全集編年箋注』（中華書局、二〇一五年）に據る。

(15) 宋緒連「李白低首謝宣城」（『遼寧大學學報』第五十九期、一九八三年）、楊玉山「李白與謝朓」（『安徽工業大學學報（社會科學版）』第二十二卷第一期、二〇〇五年）などがある。

(16) 『文鏡祕府論』地卷「十四例」其十一に「立比成之例。詩曰『餘霞散成綺、澄江淨如練』」とある（六地藏寺善本叢刊所收、汲古書院、一九八四年）。本論では「澄江」句の用字について論じるため、寫本を用いた。

(17) 『舊唐書』卷一六六・列傳一一六「白居易」に「…『餘霞散成綺、澄江淨如練』…之什、麗則麗矣、吾不知其所諷焉」とある（中華書局、一九七五年）。

(18) 松浦友久『李白詩選』は當該箇所に關して次のように述べている。「…ただおもしろいことに、これ（筆者注：「澄江」句）を李白の詩のなかに置いてみると、『解道澄江淨如練』のほうが、イメージとして生きいきしてくるし、いっそう李白らしい感じがする。李白には、謝朓との共通點のほかに、謝朓の詩に見られない新しい感覺、イメージの飛躍や流動感がある。『解道澄江靜如練』では、その流動感がふっと止まってしまうような感じがするからであろう」（岩波文庫、一九九七年）。

(19) 李白「落日憶山中」詩を除けば、陳子昂「晦日宴高氏林亭」詩に「歡娛方未極、林閣散餘霞」とあるのみ。

(20) 「餘霞」「成綺」「喧鳥」「春洲」「芳甸」はすべて謝朓の造語であり、「雜英」もまた、晉詩に一首あるのを除けば、六朝期の用例は他に見られない。唐代以降、これらの語彙のイメージは當初の用法から大きく離れることはない。それぞれの用例として、白居易「首夏同諸校正遊開元觀因宿玩月」詩の「向夕天又晴、東南餘霞披」、元稹「青雲驛」詩の「丹霞爛成綺、景雲輕若綈」、李德裕「憶平泉雜詠・憶春暖」詩の「雪開喧鳥至、澌散躍魚多」、無可「送姚明府赴招義縣」詩の「暮郭山遙見、春洲鳥不驚」、韋應物「見紫荊花」詩の「雜英紛已積、含芳獨暮春」、許敬宗「奉和初春登樓卽目應詔」詩の「春暉發芳甸、佳氣滿層城」などがある。

(21) 『文苑英華』卷七一四（中華書局、一九六六年）。

(22) 李白「金陵城西樓月下吟」詩の尾聯「解道澄江淨如練、令人長憶謝玄暉」は、同時に、「夜に謝朓を憶う」という定型表現をも生み出すこととなる。錢起「寄郢州郎士元使君」詩の尾聯「望舒三五夜、思盡謝玄暉」、韓翃「送客還江東」詩の尾聯「君到新林江口泊、吟詩應賞謝玄暉」、司空曙「早夏寄元校書」詩の尾聯「蓬蓽永無車馬到、更當齋夜憶玄暉」などはいずれもその代表的な用例である。このことは、いわゆる「中唐詩人の謝朓愛好」が、こと形式の面において、李白詩の影響を色濃く受けている可能性が極めて高いことを示唆している。

(23) 朱東潤『梅堯臣集編年校注』卷二十七（上海古籍出版社、一九八〇年）。

(24) 北宋・陳淵『默堂先生文集』卷五（四部叢刊三篇所收、商務印書館、一九三六年）。

(25) 南宋・王象之『輿地紀勝』卷九（中華書局、一九九二年）。

(26) 北宋・黃轍『碧溪詩話』卷五（人民文學出版社、一九八六年）。

(27) 『詩品』中品「宋法曹參軍謝惠連詩」に、「宋法曹參軍謝惠連詩、小謝才思富捷、恨其蘭玉夙彫、故長轡未騁。…『謝氏家錄』云『康樂每對惠連、輒得佳語。後在永嘉西堂、思詩竟日不就、寤寐閒、忽見惠連、卽成『池塘生春草』。故常云『此語有神助、非吾語也』』」とある（上海古籍出

版社、一九九四年）。

（28）謝朓詩の版本に關する先行研究に、何兆吉・趙瑞民「『謝宣城詩集』版本源流考」（『西北第二民族學院學報（哲學社會科學版）』第三期、一九九〇年）、阿部順子「『謝朓集』版本淵源述」（『古籍整理研究學刊』、二〇〇〇年）がある。

（29）前掲『謝宣城集校注』附錄二「舊刻序跋」。

（30）南宋・魏慶之『詩人玉屑』卷八「襲全句」に「此格本出於李謫仙。其詩云『解道澄江淨如練、令人還憶謝元暉』蓋『澄江淨如練』即元暉全句也。後人襲用此格、愈變愈工」とある（上海古籍出版社、一九七八年）。

（31）任淵・史容他注、黄寶華點校『山谷詩集注』卷七（上海古籍出版社、二〇〇三年）。

（32）薛瑞生『誠齋詩集箋證』卷二十六（三秦出版社、二〇一一年）。

（33）清・顧嗣立編『元詩選』初集卷五十六（景印文淵閣四庫全書所收、臺灣商務印書館、一九八六年）。

（34）明・謝肇淛『小草齋集』卷十九（續修四庫全書所收、上海古籍出版社、一九九五年）。

（35）明・姚孫業『亦園全集』二集（四庫禁燬書叢刊所收、北京出版社、二〇〇〇年）。

（36）陳慶元・陳煒編著『鼇峰集』卷十七（廣陵書社、二〇一二年）。

（37）南宋・趙師秀『清苑齋集』（汲古閣景宋鈔南宋羣賢六十家小集所收、古書流通處、一九二一年）。

（38）明・程敏政『篁墩文集』卷八十七（景印文淵閣四庫全書所收、臺灣商務印書館、一九八六年）。

（39）明・曹学佺撰『石倉歷代詩選』卷三五五（景印文淵閣四庫全書所收、臺灣商務印書館、一九八六年）。

（40）明・陳子龍『湘眞閣稿』卷六（續修四庫全書所收、上海古籍出版社、一九九五年）。

（41）謝朓に摘むべき佳句があると指摘するものとして、清・王士禎『池北偶談』卷十三「摘句圖」に「豫嘗慾仿張爲『主客圖』之例、摘其尤者列以爲圖、與康樂『池塘生春草』、元暉『澄江淨如練』、仲言『露濕寒塘草、月映清淮流』、幷資藝苑談助」とある（中華書局、一九八二年）。また、清・方東樹『昭昧詹言』卷二十一に「漢魏詩只是一氣盤旋、晉以下始有佳句可摘、此詩運升降之別。古今流傳名句、如『思君如流水』『池塘生春草』『澄江淨如練』『紅藥當階翻』『空梁落燕泥』、情景俱佳、足資吟詠」とある（人民文學出版社、一九六一年）。

（42）明・鍾惺、譚元春輯『古詩歸』卷十三（續修四庫全書所收、上海古籍出版社、一九九五年）。全文は次のとおり。「謝詩驚人處當于『風草不留霜』此等句求之、二句亦可作謝詩評。其他如『日出衆鳥散』『斂性就幽蓬』『滅燭聽歸鴻』『烋華臨夜空』『折荷戢寒決』『微風吹好音』『落日飛鳥遠』『國小暇日多』『竹外山猶影』『高琴時以思』『輕鳴響澗音』『遊蜂花上食』『揮袂送君已、獨此夜琴聲』『業上凉風敕』『墮珥答琴心』、皆遠勝『澄江靜如練』等句、因太白偶然拈出、千古耳食同聲耳」

（43）謝朓「冬緒羈懷示蕭諮議虞田曹劉江二常侍」詩の「風草不留霜、冰池共如月」を指す。

（44）清・姚瑩『後湘詩集』卷九（『中復堂全集東溟文集外集』、文海出版社、一九七四年）。